
失われた国 一夢に囚われしもの一

沢風 炯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

失われた国 ―夢に囚われしもの―

【Nコード】

N0876Y

【作者名】

沢風 炯

【あらすじ】

大陸の中心を統べるクライスト帝国。弓術師で賞金稼ぎのファイは、安定した高収入を求めて城の求人募集の面接を受ける事に。募集は大魔術師の助手。さくつと面接に受かったものの、その大魔術師アシュリーに会ってみれば「要らない」と言われる始末。負けければ即・クビの御前試合でなんとか残り、正式に助手（何故か兼護衛）となったものの、一向に「要らない」と言われ放置されるのは変わらず・・・。

そんなアシュリーに勝手についていく彼女と、彼女を面白がって

応援する城の住人達。そうしてある日訪れた嵐が、クライストに危機を及ぼす可能性があるとアシュリーと出かける事に。徐々に距離の近づいて行くアシュリーとフィフィの物語。

プロローグ

孤島の王国があつた。

大昔には誰も知らなかった王国。

外界となんの接触もなく時を過ごしたその国は
何時でも花が咲き乱れており、とても美しく、平和で、穏やかな
国だった。

治めるのは代々女王。

優雅で美しく、聡明で、誰からも好かれていた。

??時代が移り変わり

やがて一隻の船がこの孤島を見つけると、瞬く間に外界との交流
が始まった。

文化、物資、様々なものが行き来し
いつしか王国に、外界の血が混じるようになっていった。

それは、王家にも言える事。

しかしその頃から、王国の花々は枯れていった。
憂えた誰もが親身になって世話をしても
それを拒絶するかのように、花は枯れていった。

そして、花が枯れるにつれ、孤島を囲む海が荒れていった。

徐々に外界は孤島に近付くのを止め、遂には誰も近寄らなくなつた。

海は荒れ、花は枯れ、人も病に倒れるものが多くなっていった。

それでも、王家だけは病に倒れなかった。

けれどもいつも悲しみが付き纏い、次第に荘厳な城から出る事は無くなった。

失意の底で、女王は祈る。

どうかこの海が静まるよう。

どうかこの花々が咲き乱れるよう。

どうか病が無くなるよう。

どうか、どうか???

この王国が、かつての美しい姿を取り戻すよう。

そして???

願わくば、哀れな私の娘が、愛するあの方と共にいれるよう。

その晩、女王は眠りについた。

眠りは夢を誘い、彼女を虜にする。

咲き乱れる花々。楽しそうな人々。静かに波打つ海。

あの方と幸せそうにする娘。

全てが望むもの。

全てが憧れるもの。

そんな夢を毎晩見るようになっていた。

そんな夢にずっといたいと思う様になっていた。

それが現実ならいいのにと願うようになっていた。

ある朝、姿を見せない母を不思議に思った王女は、そっと母の寝室を覗いた。

眠っている母の顔を見て、王女は少し微笑んだ。

その顔が、あまりに幸せそうに満ち足りていたから。

しかし、そっと頬を撫でて凍り付いた。

女王はもう、冷たくなっていた。

それなのにどうだろう。

その肌は柔らかく、まるで生きているかのよう。

鼓動も止まり、息もしていない。

それなのに、女王は眠っているようにみえる。

その肌は、冷たく。

しかし、生きてはいない。

いつの間にか、母の周りには、失われた花々が芽吹き始めていた。

時は流れ??

ここはクライスト帝国。大陸の中心を統べる大国であり、その中心である王族、軍人のみならず国民さえもが国を考え、国を作っている。

絶対的な信頼でこの国は成り立っていた。

その帝国一のギルドで今、運命の歯車が廻り始める??。

「高収入? そんなのいくらでもあるだろうが。ほれ、こいつなんか生け捕りにしたらかなりの大金だぞ?」

そう言ってギルドの男が指名手配書をひらひらと振る。それをうつとおしそうに見やり、言葉を続けた。

「そうじゃなくて、持続出来るものないか?」

ギルドの男はぴくりと眉を跳ね上げ、訊ねた相手を睨んだ。

「だったら城にでも行け! ここは安定職の仲介所じゃねえ。」

「じゃあ城関連のないのかよ。」

「城に行きやあ分かる事だろうが!」

はあ、と相手は大仰に溜め息を吐く。わざとらしく落胆して見せるのだ。

「帝国一のギルドだっていうから、期待してきたのに残念だな。結局他廻るしかないのか!。無駄足だったな。」

相手はまだ二十歳前後だろう。細身の体は鍛えてありそうだが、別段熟練した風でもない。そんな青二才に馬鹿にされるわけにはいかなかった。

「無駄足だと!？」

「だってないんだろ? 城の仕事は城に行かなきゃ分かんないんだろ? なら無駄足じゃねーか。」

「おい! ナメた事言ってんじゃないぞ。」

そう言つと、ギルドの男は何かを思い出したようで、忙しくリストをめくると、一枚の紙を嫌味な笑顔とともに突き出してきた。

「月収200万イルだ! 文句ねえだろうが!」

返事はせず、相手は紙をひつたくと内容を確認し始めた。

「……大魔術師の助手? 該当者も内容も、全部わかんねえじゃねえかよ!」

「面接で話すって書いてあんだろ? どうすんだ。」

「……仕方ねーな。受理しろ。」

「偉そうに言うんじゃないよ!」

ギルドの男は荒々しく書類に判を押し、相手に押し付ける様にして渡した。こんな生意気なガキの相手などしていたくはない。

「さっさと失せやがれ!」

そう怒鳴ったものの、身体に触れて違和感を感じた。男の顔色が変わると、相手は舌打ちとともに紙を奪い取り、一步離れてから不遜に笑う。

「礼は言っというてやるよ。」

捨て台詞とともにさっさと出口へ向かう。男は何も言えないまま、扉が閉まるのを見ていた。

クライストの城では、一つの魔法陣の前で思い悩む女性がいた。名はニルヴァ？ナ。呼び名はニル。

儚気だが芯の強そうな瞳は赤みを帯びた紫。端麗な容姿を飾る真っ直ぐで長い髪は艶めく銀色。少し突き放した物言いをするが、困っている者を放っておけない性格から、男女から好かれる大魔術師だ。

「さて…なんて説得しようかしら…」

今も放って置けない事態をなんとかしようと、思い悩んでいる。すると廊下から声をかけられた。

「ニルヴァ？ナ様！いらっしやいますでしょうか？」

兵士だろう。ニルは魔法陣を諦め、扉を開けた。

「なに？」

「はっ！ギルドから、助手の希望者が来ております！」

「助手…？ああ、あれね！どこにいるの？」

「はっ！検問室で待機しております！」

「そう、ありがとう。」

それだけ言ってニルは歩き出す。兵士は数秒見送っていた。

「ニルヴァ？ナ様…お綺麗だ…！」

検問室に入ると、すぐに希望者が目に入った。厚手のマントを羽織り、緊張した様子もなく椅子に座っている。その様に、思わず笑ってしまった。すると希望者がこちらを見て立ち上がった。

「私は大魔術師のニルヴァ？ナよ。」

「…弓術士のフィフィです。助手を探してるのは貴方ですか？」

「……貴方、女性？」

「はい。よく間違えられますが、女です。」

ニルはまじまじとフィフィを見てしまった。

薄茶の髪は肩につくかつかないくらいで、背も女性にしては高め、男性にしては低めといったところ。顔立ちも中性的で、男だと判断されるのは、少し低めの声と、落ち着いた、少し堂々とした態度からだろう。

「…男名を下さると便利なんです。」

その台詞に、今度は噴き出してしまった。

「面白い人ね！さ、座って。話をするわ。」

言われてフィフィが腰を下ろすと、ニルは少し楽しそうに話しかけた。

「ここへ来る前は何を？」

「ギルドで色々。主に賞金稼ぎです。」

「そう。こういう仕事は？」

「した事はありません。」

「魔術に興味があるの？」

「いえ、特には…」

「家事は出来る？」

「…？…はあ、一通りは…。自分が生活出来る程度には出来ませんが…」

「そう。男は嫌い？」

「…？…特には…」

「他国には行ってみたいと思う？」

「…？…まあ、多少は…」

「面倒見はいい？」

「…？…面倒見た事ないのでなんとも…」

「そう。素直なのね。」

「…そうですか？」

ニルは何やら頷くと、にっこりとフィフィに微笑んだ。

「では試用期間を設けましょう。3週間頑張ってみて。」

そう言つてニルは席を立つ。すると、フィフィが慌てて呼びかけ
てきた。

「え！？ちよつ…今ので終わり？」

「あら、終わり。充分よ？」

「いやいやいや、仕事内容は？」

「ああ…本人に聞いて頂戴。」

「ん…？」

フィフィはまじまじとニルを見た。

「貴方の助手じゃないんですか…？」

「あら…私の助手じゃないわよ？私にはもういるもの。助手が必要なのはもう一人の方なの。あ、これ書類ね。持って行って。」

「もう一人…？」

そうそう、とニルはフィフィに頷く。

「あ、あと男名ね。フィアニスと名乗ってもいいわ。好きな様に使つて。ただし王家の方々には女名でね。」

「もう一人つて？」

フィフィは今にも去りそうなニルに懸命に言葉を投げる。対して
ニルはにっこりと笑つて言つた。

「部屋の外にいる兵士が案内するから、ついて行きなさい。じゃあ
ね。」

そう言つてニルが手を振つて部屋を出ると、入れ替わりに兵士が
入ってきた。

「ご案内致します、フィアニス様！」

「……………」

置いて行かれたフィフィは、仕方なしに少々疲れた思考を切り替えた。

（もう男の設定でいいんだな？）

取りあえず面接は通ったようだ。

今からその大魔術師の元へ案内してくれるようだし、それなら言われた通り、本人に色々訊くのが得策だろう。

そう考えて、フィフィは兵士に向き直って頷いた。

「頼む。」

取りあえずは、ついていく他ないだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0876y/>

失われた国　－夢に囚われしもの－

2011年10月31日15時10分発行